

3 学年道徳資料

「ガーナに賭けた青春　　〜ガーナ・アチュワ村にて〜」

僕の名前は武辺寛則。僕が、青年海外協力隊員として西アフリカのガーナ共和国に着いたのは一九八六年の十二月十五日の夜であった。飛行機のタラップを降りた時、一人の警備員が僕に向かつて、まっ白な歯を見せてこう言った。「オー、ウエルカム・トゥー・ガーナ」。その爽やかな笑顔が、僕にはとても印象的で、何となく嬉しくなったガーナ初日の夜であった。

無事、任国内旅行（一度アチュワ村を訪れて、短期間の訓練や研修を行うこと。）を終えて首都アクラに戻り、村で生活するための準備をした。正式にアチュワ村に赴任したのは、一九八七年に一月二十日だった。僕はこの村に入る3代目の村落開発普及員で、「自給自足的な村内において、現金収入の増大を計るプロジェクトを、村人と共に企画、実行する。」というものであった。これを達成するために、幾つかの条件を考えた。それは、①、天候の影響をあまり受けないこと。②、村人自身で行えること。③、村の条件に合ったもの。以上の三つであった。

さまざまな調査の結果、僕は「この村では農業を伸ばすことが一番適している。」という結論に達した。まず養鶏に着手することにした。養鶏ならば、老人や子どもでも十分働けるし、商品価値の高い卵を採ることによって、現金収入が得られると思ったからだ。しかし、鶏舎が蟻の大群に襲われ、鶏舎の周りに火を放って鶏を守るなど、日本とは違う自然の持つ脅威を実感したこともあった。

例年なら6月にはもう雨季が始まっているが、この年は特に暑く雨も少なかった。そんな六月のある日、村の男たちが僕の家を訪ねてきた。

「タケ、お前も知っているように、今年雨が少ない。三月にまいたコーンは、小さいまま枯れてしまった。」

「キャッサバ（芋の一種）も大半がだめになっているんだ。」

「食料は市場で買ってくるしかないが、そんな十分な金もない。」

村人たちのぼやきは続いた。考えてみれば、現金収入の少ない村人達にとって、毎食のコーンを市場で買うことは、ひじょうに困難なことであった。

この年、干ばつにもかかわらず枯れずに残ったのがファンティーパイナップル（ガーナのファンティー地方で栽培されている、香りや甘みがひじょうに強い独特なパイナップル）だった。当時、この村でパイナップルを栽培している者は、わずかに五名。しかし、この干ばつにも強いという実績を評価して、新しく栽培を希望している者は六五名もいた。まずは、みんなをまとめるためにパイナップル協会を設立した。

さまざまな失敗を繰り返しながら、僕の仕事は少しずつ前進して行った。振り返ると、ここまで僕が手掛けた仕事は、リヤカーの作製、養鶏、パイナップル・ファームなどが、何一つ他人の手を借りずに出来た仕事はなかった。

ところで、僕がガーナに来て学んだことの一つで、日ごろ教訓としてしていることに「意志ある所、道は通じる」というのがある。日本のように、何かをしようとしたときに、他人がお膳立て（準備をしてくれること）してくれることは、この国では稀である。自分が行動して、目標に達しなければならぬ。

そんなある日、僕は酋長や長老達に呼ばれた。彼らの家に行って話を聞いてみると、「村の中をまとめるナナ・シピ（長老の中の一人）」という役職に就いてくれ。」とのことだった。「僕は、いずれかは村を離れる人間なので、こんな責任ある仕事は出来ないよ。」と言って断った。これで話は済んだものと思っていたら、一週間後に長老の一人から「タケ、お前はあと一年以上ガーナにいるんじゃないか。村で話し合った結果、ぜひともナナ・シピへの就任を受けてもらおうということになった。」と言い、村の若者にかつぎだされて、周囲を取り囲まれながら、村の中をねりあるいた。ナナ・シピへの就任式は、一九八八年九月二十四日の収穫祭に行われた。村の中、僕を中心とした行列が一周した後、酋長と長老のもとに行き「村の発展のため、今後がんばります。」と宣言した。ナナ・シピになってから、他の村人に「ナナ・シピになったんだってな。おめでとう。」と声をかけられることもあった。恥ずかしくもあり、うれしくもあった。

任期を一年延長した僕には、残り一年の期間がある。二年が過ぎた今思うことは、新しいことを導入したり始めることは比較的容易だが、それを定着させ続けていくことは、とても難しいことだ。アチュワ村に住んで二年、この間に多くの「喜び」「驚き」

「怒り」を経験し、周りの人々に応援してもらいながらここまでできた。そして、今僕はも

う一度この言葉を胸において、残り一年を村人と共に頑張るつもりだ。「意志ある所、道は通じる」と。